

第5次レッドデータブック：
絶滅のおそれのある日本の野生生物
The 5th Red Databook, Threatened wildlife of Japan

トウネン

Calidris ruficollis (Pallas, 1776)

守屋年史（バードリサーチ）

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会 鳥類分科会



令和8（2026）年3月



特に文献内で別途指定がない限り、この文献はクリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンスの下に提供されています。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

種毎の解説を引用する場合には以下のように記述してください。

引用表示：守屋年史，2026．トウネン．環境省（編）第5次レッドデータブック：絶滅のおそれのある日本の野生生物，pp. 703-707．

Citation: Moriya, T., 2026. *Calidris ruficollis* (Pallas, 1776). In: Ministry of the Environment, Japan (ed.), *The 5th Red Databook, Threatened wildlife of Japan*, pp. 703-707.

トウネン

Calidris ruficollis (Pallas, 1776)

カテゴリー判定結果		準絶滅危惧 (NT)		①
基準 A: VU 未満	基準 B: —	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ①個体数が減少している。 【判断理由】 分析による個体数変化は、2007 年から 2017 年の平均の結果では 30%以下で VU の基準を満たさないが、秋期のみでは減少率は 30%を上回り、2017 年以降も減少傾向が継続していること（環境省自然環境局生物多様性センター 2020）、全国的に減少傾向にあるが、特に都市部の東京湾、大阪湾、博多湾などでの減少が大きい。干潟などの埋立は回復の見込みが低く不可逆的であること、水田等も、今後、放棄や転作等により減少が懸念されることから、今後絶滅危惧のカテゴリーに移行する可能性が高いと考えられる。				
評価分科会： 鳥類分科会				

概要

足は黒色で短く、黒い嘴は頭長より短い小型のシギ。雌雄同色。繁殖羽は顔から胸部まで赤褐色、背面は赤褐色、黒色、白色のまだら模様で、腹部は白色。非繁殖羽は、頭頂から背面にかけて灰褐色、顔から腹部にかけては白色。国内では繁殖せず、渡り鳥として春期、秋期に全国で観察される。干潟や砂浜、水田などの湿地を採食地として利用する。河口、干潟などの浅海域、水田などの湿地に生息するため、河川や海岸開発、圃場整備による生息環境の減少や変化が個体数減少に影響していると考えられる。

基礎情報

【形態】

全長 15 cm。足は黒色で短く、黒い嘴は頭長より短い小型のシギ。雌雄同色。繁殖羽は顔から胸部まで赤褐色、背面は赤褐色、黒色、白色のまだら模様で、腹部は白色。非繁殖羽は、頭頂から背面にかけて灰褐色、顔から腹部にかけては白色。幼羽は、非繁殖羽に似るが、上面に褐色味がかかる。ヨーロツパトウネンと酷似する。

【生活史】

国内では繁殖せず、渡り鳥として春期、秋期に全国で観察される。繁殖期は、5月～7月。亜寒帯のツンドラ地帯で、谷間、丘などの草原に営巣する。一腹卵数は3～4個で、通常4個産卵する。雌雄交代で抱卵し、育雛は雄が行う。ミミズ、ゴカイ、甲殻類、昆虫、小貝、草の種子などを食べる。干潟表面に発生するバイオフィルムも採食する。非繁殖期には群れで生活する。

【生息環境】

渡り期に、干潟や砂浜、水田などの湿地に渡来する。薄く水に浸かるところや、乾きかけた泥地などで採食する。

生息環境区分：	【陸域_平地部 海岸部】田地・畑地，湿地・湿原，河口域，砂浜・礫浜，汽水域，塩沼地・塩性湿地・河口干潟，潟・汽水湖 【海域（沿岸）_潮間帯】干潟
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域，(4) 河川・湿地地域，(5) 沿岸域

【分布域】

ユーラシア大陸の北極圏で局地的に繁殖し、東南アジアからオセアニアで越冬する。国内では、春・秋の渡り期に干潟を中心とした各地の湿地で観察される。

日本には旅鳥として各地に多数が現れ、最もふつうにみられる小型のシギと認識されていた。

現在の生息状況

【分布域の現況】

現況でも全国的に確認されるが、湿地、陸水域、海岸などの水辺に限られるため、水辺環境の消失は国内分布に影響を与えている可能性がある。

【生息地の現況】

干潟や湿原の減少により利用可能な生息地が減少している。1945年以後の消失干潟の累計は 33,120 ha、1945年から2005年間の60年間の干潟の消滅率は40%になる（花輪2006）。

【個体数の現況】

IUCN のレッドリストでは、準絶滅危惧種（Near Threatened）とされている。WaterbirdsPopulations Portal（Wetland International）では、東アジアのフライウェイで、個体

数約 47.5 万、減少傾向とされている。

2008 年を基準としたモニタリング調査の結果を用いた研究では、トウネンの春期の推定変化率は、21.04% (30 年前比)、66.99% (20 年前比)、-15.72% (10 年前比)、秋期の推定変化率は、-58.26% (30 年前比：有意)、23.77% (20 年前比)、-23.47% (10 年前比) (Amano et al. 2010) であり、春期・秋期とも著しい減少を示していた。

直近のモニタリングサイト 1000 シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度 とりまとめ報告 (2020) では、Amano et al. 2010 と同様の分析を行い、最大個体数指標を算出した。2000 年を基準値 1.00 とし、2007 年時点で、平均 1.09 (春期 0.84、秋期 1.34)、2017 年時点で、平均 0.85 (春期 0.79、秋期 0.90)。春期・秋期とも減少傾向が見られている。特に秋期は増加傾向が見られたのちに減少している。

存続を脅かす要因

河口、干潟などの浅海域、水田に生息するため、河川や海岸開発、圃場整備による生息環境の減少や変化。

要因の区分：	(過去)	河川開発，海岸開発，湿地開発，圃場整備，捕獲・狩猟/園芸採取，混獲・錯誤捕獲
	(現在)	河川開発，海岸開発，湿地開発，圃場整備，捕獲・狩猟/園芸採取，混獲・錯誤捕獲，気候変動

特記事項

日本に渡来するガンカモ類やシギ・チドリ類などの渡り性水鳥類が利用する主要な渡来地については、河川湖沼 84 ケ所のうち 41.7%が保護区域未指定、干潟・湿地 152 ケ所のうち 66.7%が保護区域未指定であり、干潟・湿地を利用する鳥が多数訪れる場所については、保護指定が遅れている現状が指摘されている (三上ら 2012)。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	—	—	—
第4次 2019:	—	—	—
第4次 2018:	—	—	—
第4次 2017:	—	—	—
第4次 2015:	—	—	—
第4次:	—	—	—
第3次:	—	—	—
第2次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和6年度末時点）

【千葉県】一般保護生物(D), 【東京都（本土部）】絶滅危惧Ⅱ類(VU), 【東京都（区部）】絶滅危惧Ⅱ類(VU), 【東京都（南多摩）】絶滅危惧Ⅱ類(VU), 【神奈川県】絶滅危惧Ⅱ類(非繁殖期), 【愛知県】絶滅危惧Ⅱ類(VU)(通過), 【滋賀県】希少種, 【京都府】絶滅危惧種, 【大阪府】準絶滅危惧(NT), 【岡山県】準絶滅危惧, 【福岡県】絶滅危惧Ⅱ類(VU), 【長崎県】絶滅危惧ⅠA類(CR)

保護に係る法令指定状況（令和7年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Amano, T., T. Székely, K. Koyama, H. Amano and W. J. Sutherland, 2010. A framework for monitoring the status of populations: an example from wader populations in the East Asian-Australasian flyway. *Biological Conservation*, 143: 2238-2247.
- 天野一葉, 2006. 干潟を利用する渡り鳥の現状. *地球環境*, 11 (2): 215-226.
- IUCN 2023. The IUCN Red List of Threatened Species. Version 2022-2. <<https://www.iucnredlist.org>>
- 環境省自然環境局生物多様性センター, 2020. 重要生態系監視地域モニタリング推進事業（モニタリングサイト 1000）シギ・チドリ類調査 2004-2017 年度とりまとめ報告書. 環境省, 富士吉田市.
- 三上かつら・高木憲太郎・神山和夫・守屋年史・植田睦之, 2012. 渡り性水鳥類の渡来地の保護区域指定の現状. *日本鳥学会誌*, 61(1): 112-123.
- 日本鳥学会, 2024. 日本鳥類目録改訂第8版. 日本鳥学会, 東京. 506pp.
- Van Gils, J., P. Wiersma, G. M. Kirwan and C. J. Sharpe, 2020. Red-necked Stint (*Calidris ruficollis*), version 1. 0. In *Birds of the World* (J. del Hoyo, A. Elliott, J. Sargatal, D. A. Christie, and E. de Juana, Editors). Cornell Lab of Ornithology, Ithaca, NY, USA. <https://doi.org/10.2173/bow.rensti.01>
- Wetlands International, 2023. “Waterbird Populations Portal”. Retrieved from wpp.wetlands.org on Tue Sep 26 2023.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Calidris ruficollis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Calidris ruficollis* is listed as NT under criteria ①.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are

likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain, Beach】 Farmland, Wetland, Estuary, Sandy beach/Pebble beach, Brackish water, Salt marsh/Intertidal mudflat (including mangrove wetland), Lagoon/Brackish lake 【Marine area (Coastal area)_Intertidal zone】 Intertidal mudflat
Threat types:	River development, Coastal development, Wetland development, Field preparation, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Bycatch, Climate change
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.



執筆者: 守屋年史 (バードリサーチ)
Author: Toshifumi Moriya

公表年月：2026 年 3 月